



Title	<書評>拝野寿美子『継承ポルトガル語の世界：地域とつながり異文化間を生きる力を育む』
Author(s)	モッタ, フェリッペ
Citation	Anais : Colóquio de Estudos Luso-Brasileiros. 2024, 50, p. 67-71
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/98445">https://hdl.handle.net/11094/98445</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 書評

### 拝野寿美子『継承ポルトガル語の世界 —地域とつながり異文化間を生きる力を育む』

フェリッペ・モッタ

元来は世界中に散らばったユダヤ民族を指す用語であったディアスボラ（離散）は、人文社会科学において長らく用いられてきた。次第にアフリカ系、ギリシャ系、華僑などにも適用されるようになり、現在では国際的に移動し、世界各地で祖国との文化的、感情的、経済的な繋がりを維持するさまざまなコミュニティを指すために用いられている。

ならば、ブラジル人ディアスボラは、ブラジルから他国に移住したブラジル人、または越境の結果として形成されるコミュニティ全体と定義できる。移住の理由には、経済的機会の追求、政治的迫害の回避、教育、家族の再会などがあり、主要な移住先にはアメリカ合衆国、ポルトガル、パラグアイ、イギリス、日本が含まれる。多くのディアスボラ・コミュニティと同様に、在外ブラジル人も現地社会に適応しながら、言語や文化の違いによる課題に直面している。その中でも重要な課題の一つが母国語、すなわちポルトガル語の継承である。

継承語（heritage language/ língua de herança）は、家庭やコミュニティ内で親から子へと伝えられる、または移民や多文化社会で保持される言語と一般的に考えてよい。継承語は文化的アイデンティティやコミュニティの繋がりを維持する重要な役割を果たし、移民社会における文化遺産の保存に貢献していることも確実である。通常、親が自国の言語を家庭内で使用し、子どもがそれを学ぶことによって、言語が次世代に継承される過程が想定されるが、教室や教会のように継承を補助し、または促進する様々なアクターが存在する。

なお、言語は移民の第二世代やそれ以降の世代においても維持されることがあるが、社会的な圧力や教育システムの影響により失われる危険も存在する。親子のコミュニケーションのみならず、自己アイデンティティの構築の重要なファクターである継承語を次世代に継承させる仕組みはどういうものなのか。

主にブラジル人ディアスボラに着目し、継承語としてのポルトガル語 (Português como Língua de Herança, PLH) の様相を取り上げる貴重な学術的貢献として、拝野寿美子の『継承ポルトガル語の世界—地域とつながり異文化間を生きる力を育む』（ナカニシヤ出版、2024年）が挙げられる。本書において、教育学を専門とする著者はポルトガル語母語話者が越境した後に直面する言語の継承という問題を分析している。拝野氏は、大学でのポルトガル語教育に携わっているが、本書は高等教育のみならず、幼少期から大学までのポルトガル語を継承する者、あるいは継承ポルトガル語教育に実際に関わっている人物および組織を取り上げている。2006年から2023年まで著者が実施した調査をもとに、世界で広がり、日本でも認知されはじめた継承ポルトガル語教育の内容や、それが個人や社会にどのような価値をもたらすかを考察している。

もちろん、継承ポルトガル語は日本の研究者にとって非常に意義深い課題である。1990年の入管法改正に伴い在日ブラジル人が急増し、リーマンショック直前の約30万人から2024年現在はおよそ21万人のブラジル人が日本で生活している（国籍別で考えると5位である）。「デカセギ」（decasségi）と通称されるこれらの者たちは、トランスナショナルな存在であるものの、滞在は長期化する傾向にあり、愛知県、静岡県、群馬県や滋賀県などにコミュニティを築いている。在日ブラジル人コミュニティは移住政策の研究のみならず、移民史研究の研究対象でもある。また、日本における多文化共生のケーススタディとして注視する必要があり、ブラジルおよびポルトガル語と関わる研究者はその仲介者となる。本書はこの状況を見据えた上で読まれるべきだろう。

本書は序章と終章を除き、2部6章から構成されている。序章において先行研究を概観し、継承語、とりわけ継承ポルトガル語の定義がなされている。「世界の継承ポルトガル語」と題される第一部において拝野氏はブラジル人の海外移住を俯瞰し、世界における継承ポルトガル語教育の概略を示す。第二部である「日本の継承ポルトガル語」において今度は在日ブラジル人コミュニティに焦点を当てる。このように、在日ブラジル人コミュニティの特有性（第二部）をより正確に把握するため、著者は世界における継承ポルトガル語の概観や個別具体的な事例（第一部）から考察を始めている。終章において拝野氏は今後の継承語教育に向けての課題と展望を綴

っている。なお、著者は「日本に多く存在するブラジル人学校においてはポルトガル語を子どもたちの第一言語、母語と想定して実施される教育であるため、本書で扱わない」（15頁）としている。

第一部は「ブラジル人の海外移住」（第一章）および「世界における継承ポルトガル語教育」（第二章）から成っている。ここにおいて著者は20世紀のブラジル人ディアスボラの概要を示し、インタビューおよび参与観察に基づいた北米（ボストン）および欧州（ロンドン）の事例を紹介しているが、それを通じて読者は著者の独自の研究成果だけではなく、英語やポルトガル語など、外国においてなされてきた研究に接することができる。

ところで、在日ブラジル人コミュニティ以外の事例はブラジル人ディアスボラの特殊性を考える際に極めて重要である。移民研究において「ディアスボラ」という分析概念の有効性をめぐり多くの紙幅が費やされてきたが、なかんずく視点の問題が重視されるべきである。それについて、ロビン・コーベンとキャロリン・フィッシャーは下記のように述べている。（日本語訳は評者による）

In other words, the *emic* (the perspective of the subject) and the *etic* (the perspective of the observer) matters. *Etic* classifications of a perceived group as diaspora are based on a combination of certain defining features. Conversely, as an *emic* category of self-identification, the notion of diaspora is imbued with emotionally laden meanings that are intertwined with the specific history and experiences of the population in question.

他の言い方をすれば、エミック（調査される主体の側からの視点）とエティック（観察者の側からの視点）の両方が重要である。エティックの分類では、あるグループをディアスボラとして認識することは、特定の定義的特徴の組み合わせに基づいている。逆に、エミックの自己同定カテゴリーとしてのディアスボラの概念は、対象となる集団の特定の歴史や経験と絡み合った感情的な意味を帯びている。

(Cohen, Robin and Carolin Fischer (eds.), 2019. 'The Routledge Handbook of Diaspora Studies'. Abingdon, New York: Routledge, p.2)

継承ポルトガル語の教育を受けた者のみならず、教育の実践に携わっている人物の声を拾う押野氏の貢献は、エティックな観点だけでなく、当事者ならではのエミックな視点も提供している。これにより、例えはブラジルから欧州に移住した人々で、もともとの祖先が当該地域であったことで市民権を獲得したブラジル人の感情や、北米に移り住んで他のラティーノと同視されたくないブラジル人の戦略など、ブラジル人ディアスボラの多様な実態が垣間見える。事例の分析を通じて、読者は継承ポルトガル語が決して同質なものではなく、地域的または時代的な多様性を示すことが理解できる。

第二部は「日本でポルトガル語を継承した青年たち」（第三章）、「日本における継承ポルトガル語教育」（第四章）、「日本で生き抜くための継承ポルトガル語教育」（第五章）、そして「継承ポルトガル語話者のとなりで」（第六章）から成る。ここで著者は、日本における継承ポルトガル語に焦点を当て、ポルトガル語がどこで学ばれているか、誰が継承ポルトガル語教育を担っているか、また教材がどのようなものであるかを紹介している。日本社会の現状に即した分析を通じて著者は長年の研究成果を展開しており、とりわけ当事者とのインタビューが印象に残る。継承語教育を通じてブラジルにルーツを持つ学習者に帰属感（pertencimento）を育む過程が事例を通じて明らかにされていく。

なお、日本以外のブラジル人ディアスボラとの比較が本書の強みである一方で、日本国内の他のマイノリティー集団との比較・対照の視点が不足している。著者は序章で在日コリアンコミュニティを対象とした言語文化教育に触れているが、その視点は後の分析には表れていないように感じられる。また、継承ポルトガル語を対象とする本書は、「言語」を支柱にしていない文化的伝承の営み（例えば、「阪大ふくふくセンター」と称される大阪大学複言語・複文化共存社会研究センター）を研究対象としていない。加えて、著者の重点がフィールドである在日ブラジル社会に置かれているため、ポルトガル語圏諸国のディアスボラの事例の言及に限られている。今後は在外ブラジル人以外のコミュニティとの比較対象や関係性の分析の研究が望まれる。序章をはじめとして本書はブラジル以外のポルトガル語圏諸国のディアスボラに言及しているが、在外ブラジル人コミュニティ以外との接合および比較が今度の課題として望まれる。

入管法改正から約 35 年が経過した。これまでに在日ブラジル人社会は大きく変貌してきた。「デカセギ」たちが定着し、成人している第二世代も存在する今日、継承ポルトガル語に注意を払い、その仕組みを理解することは、ポルトガル語／ブラジル研究に関わる者だけでなく、現代日本社会の在り方を考えたい者にとっても必須である。押野寿美子の著作は、その先駆的な研究成果として貴重な貢献をもたらしている。今後の研究の展望に大いに期待したい。